SORA

web magazine 2013.mar. vol.09

世界を巡る中村卓哉が感動したパプアニューギニア。
ありのままの自然が残る秘境へ。

Photo & Text : Takuya Nakamura

MAP CLICK!

tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく島
tsumishima.com

(株)ワールドツアープランナーズ
www.wtp.co.jp

© 2012
World Tour Planners Co.,Ltd.
All Rights Reserved.

まずはマクロから。じっくり向き合う時間

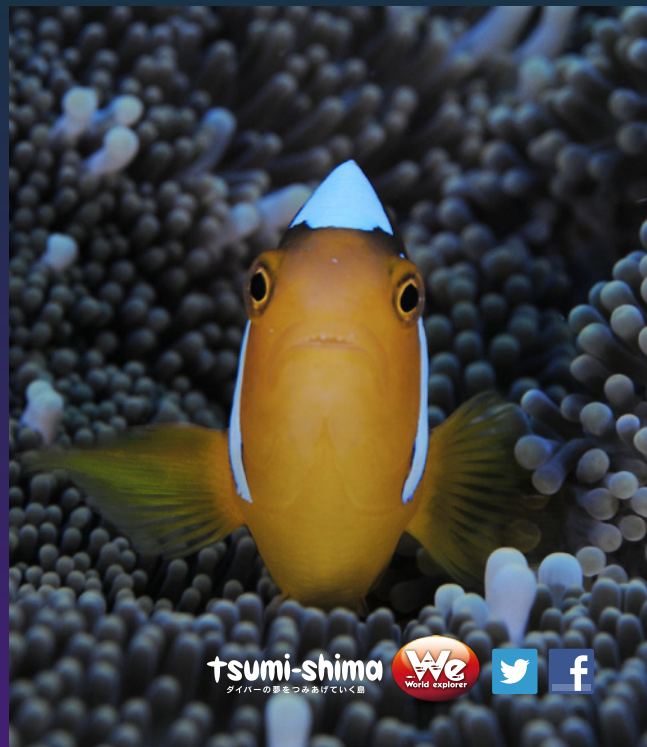
ニューギニア島の最東端に位置するタワリリゾートは北をソロモン海、南を珊瑚海に囲まれた好立地。通常クルーズ船で通うような僻地にリゾートを建てたというのだから、面白くないわけがない。

この日、船で１時間程かけて半島の南側に回り込み、珊瑚海にあるダイビングポイントへ向かった。

外洋のポイントという事でいつも以上に胸が高鳴る。大物サプライズネタを期待してワイド一本に絞ろうとカメラを準備しながらガイドのユカさんのブリーフィングに聞き耳を立てるとマクロネタの名前が次々と出てきていた。外洋でマクロとは、いきなり出鼻をくじかれる思いだったが、「郷に入りては郷に従え」に習い、慌ててマクロレンズのついたカメラをもう一台準備して海に飛び込んだ。すると突然、目の前をマダラトビエイが横切った。いきなりの出現でカメラを構える間もなく途方に暮れていると、遠くで現地ガイドさんが手招きしていた。手を指し示す方向に目を凝らすと、僅か２cmほどのオニカサゴが岩陰に潜んでいる。さらにミリサイズのデニスズピグミーシーホース、変わり種の甲殻類やウミウシを次から次へと見つけ出してくれる。この現地人ガイドさんの目の良さは驚きを通り越し、もはや人間の常識を遥かに超えた超能力のようであった。

完全に目がマクロモード全開になっていると、根から離れた深場に群れるグルクンが何やら騒然とし始めた。慌てて視点をワイドに切り替えると、なんと3m級の巨大なオオメジロザメが悠然と泳いでいた。直ぐにワイドレンズ付きカメラへ持ち替えたが時既に遅し。その姿は深い海の底に消えてしまった。

ここは常識を遥かに超えた、一瞬たりとも気の抜けない海である。



タイムスリップしたかのような原始の海

パプアニューギニアの首都・ポートモレスビーから国内線で一時間半。ビスマーク海に面したニューブリテン島の秘境、キンベの海へ訪れた。

夏場のオンシーズンという事もあって海は油凪。鏡のような水面に反射する浅場の珊瑚の森にいきなり衝撃を受ける。現地で８年ガイドをしている恵子さん曰く、ここ数年で浅瀬のミドリイシ系サンゴがさらに増殖しているのだとか。たしかに、根の上を覆い尽くす巨大なテーブルサンゴの隙間から無数の赤ちゃんサンゴが顔を出していた。なんとこの海域には約350種類ものサンゴが生息し、見られる魚の種類はなんと860種にもおよぶのだという。海のゆりかごとも言われるサンゴの森が、近年ここまで元気な場所は世界中探しても数少ない。半水面の写真を撮影するだけに丸々ダイビング一本費やす勢いでいたが、水深を下げるとさらなる衝撃の光景が広がっていた。

「なんだこれは!」思わず感嘆の声をあげる。そこには真っ赤なヤギが回廊の様に両サイドから立ち並んでいた。まるでこの間を通り抜けてくれと言わんばかりの佇まいだ。グラミー賞の授賞式会場に続くレッドカーペットを歩くような気分で赤いヤギの通路を抜けるとさらにその先に広がっている光景に度肝を抜かれてしまう。

根の上を覆い尽くすばかりのムチヤギの群生がこれでもかと生え散らかっているではないか。「ここは原始の海なのか!?」まるでタイムスリップしたかのような不思議な光景だった。こんな海がまだ残っていたのか。キンベの海は、まさに太古に回帰するようなパワーに満ちあふれていた。

tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく島
We World explorer

Ocean
海

Papua
パプアニューギニア
Niugini

tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく島
We
World explorer

Romance ロマン

Papua パプアニューギニア Niugini

美しい海の流れ星

ロロアタ島周辺のパシフィックガスという沈船ポイントに到着すると、水平線に沈む夕日を眺めながら夜の大イベントに備えた。

日本のガスタンカーを魚礁として沈めてあるこのポイントでは、日中は船体の暗がりに潜むヒカリキンメの群れが、夜になると一斉にハッチから外へ飛び出してくるという。目の下に発光器を持つこの魚は英名で「フラッシュライトフィッシュ」と呼ばれており、暗黒の海中では蛍のように光を放つらしい。

頭の中で初めて出会う光景をあれこれイメージしていると、太陽が完全に水平線に溶けていった。いざ出陣だ！カメラのシャッタースピードをバルブ（長時間開放）に固定し、ISO感度を最大限まで上げた。海の中で蛍を撮影するイメージである。水中ライトを消したまま沈船の船首部分まで続くロープを辿っていく。ライトをつけてしまうと光を嫌うヒカリキンメの群れが散ってしまうからである。ワクワクとドキドキで胸が踊らせながら、船のハッチのある水深20mを目指した。

満月の明かりに照らされた海中は想像していたより明るく、しばらく潜行するとぼんやりと巨大なタンカーのシルエットが目の前に浮かび上がってきた。目的の船体を目視でき、心の片隅にあった不安が消えていった。すると、船首のあたりがにわかにキラキラと光っているのが見える。日暮れを待っていたヒカリキンメの群れが円形のハッチの穴から今まさに暗黒の海中に飛び出そうとしている。

ハッチの穴の前でカメラを構え、そのまま10分余りじっと待つ。すると、いきなりそれは始まった。次から次へと光の玉がハッチから外に飛び出し、まるで流れ星の様に目の前を横切っていった。10秒位シャッターを開放して撮影すると、光り輝くキカリキンメの軌跡が天の川のようにカメラの液晶画面に写し出された。

「美しい！」なんてロマンチックな光景なのだろう。

それはまさに、海のプラネタリウムであった。

文化や人々にも触れる旅を

全てのものに神が宿るという精霊信仰が根付いたパプアニューギニアの人々。これは日本に古くから伝わる「アマテラス」、「ヤオロズノカミ」などの考え方に近い。未だ手つかずの自然が残るのも、こうした彼らの信仰に基づく文化や暮らしがあるからに他ならない。貝殻やサンゴを加工した伝統工芸品、庭先に出されたヤシを削る道具、岸辺に置かれた木造のカヤック、子供たちが披露してくれる「シンシン」と呼ばれるダンスや歌。一週間の滞在の中でダイビングを少し休んで彼らの生活にも触れておくことをおすすめしたい。きっとその暮らしぶりから、「人間らしい生き方とは何か」を教えてくれるはずだ。

もしかしたら彼らの瞳の奥に映る「広大な緑の大地」や「サンゴ礁の海」が精霊となってそこに宿っているのかもしれない。信仰心の全くない私でもそう思えるくらいに、ここパプアニューギニアの人々の目は輝きを放っていた。

Information

- ●国名：パプアニューギニア独立国
- ●ビザ：入国にはパスポート（有効残存日数が６ヶ月＋滞在日数）とビザが必要。ビザ取得料 100 キナ
- ●パスポート残存期間：６ヶ月以上
- ●言葉：ピジン語・モツ語（英語も通用）
- ●時差：日本より１時間早い
- ●電圧：240Ｖ／50 ヘルツ　プラグダイプは３又平Ｏタイプ（ハの字）
- ●水：ミネラルウォーターを飲むこと
- ●行き方：成田よりニューギニア航空にてポートモレスビーへ。直行便で約６時間半

tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく島
We World explorer